



このコーナーでは、水資源機構の環境保全の取り組みを紹介します。

移植手法の確立に取り組む！

植物の重要な種の保全

水の恵み分かち合う あさくら3ダム

小石原川ダム建設事業は、筑後川水系小石原川に、多目的ダム（洪水調節、水道用水の供給、流水の正常な機能の維持）である小石原川ダムを建設するとともに、佐田川から江川ダム貯水池までの導水施設を併せて建設することで、既設の江川ダム及び寺内ダムとともに水資源の有効活用を図るものです。

環境アセスメント

小石原川ダム建設事業では、環境影響評価法に基づき、環境影響評価（環境アセスメント）を実施しました。これは、事業が環境にどのような影響を及ぼすかについて調査、予測及び評価を行い、影響があると予測された動植物や水質などに対し、できる限り影響が小さくなるよう適正な配慮（環境保全措置）を実施していくものです。

植物では、環境省レッドリスト等に基づき選定した「重要な種」のうち、自生地が工事や湛水の影響を受ける7種（ミヤコアオイ、ナガミノツルキケマン、ミズマツバ、オニコナスビ、マルバノホロシ、ヒメナベワリ、エビネ）が保

全対象種になっており、移植により保全を図ることとしています。

移植試験から本移植へ

植物の重要な種については、オニコナスビのように移植に関する知見がまったく無い種もあるため、確実に移植するための試験を行った上で、生育適地に移植を実施します。

10年以上にわたる移植試験の結果、6種で移植手法がほぼ確立されました。その中で、ミズマツバは昨年本移植を実施しました。水田や湿地に生育し、稲作と同様に耕して水を張ることにより芽を出すことがわかったため、休耕田に移植し、現在は年1回の耕起・水張りを実施しています。

一方で、マルバノホロシは毎年のように野外での生育に失敗していましたが、シカ等の食害が主な原因とわかり、現在は防獣ネットの中で試験を継続しています。

これから建設事業が本格化していく中、工事区域に生育する植物の重要な種を確実に移植できるように、環境巡視により植物の生育状況を確認するとともに、専門家の指導・助言を得ながら本移植への取り組みを進めていきます。



耕起作業（ミズマツバ移植地）



環境巡視で見つかったエビネの移植